若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

5月5日
毎月5日20日発行
第30号
購読料1部80円
半年分800円 1年分1,500円(〒共)

叛旗

共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 仲代真理
発行所 東京都新宿区百人町2-197 東京バレエ劇場ビル2F 大久保プロ気付
共産主義者同盟「叛旗」編集委員会
TEL03-362-0149
振替 東京 162858

赤燈社 電話開設のお知らせ
(03) 362-6515
(5月7日から使用可能)
郵便振替番号(東京)12968

擬制的沖縄闘争を突破し、第三次琉球処分粉砕に起て！

沖縄闘争の本格的潮流の創出へ

5・13〜15へ全国から総結集せよ

全国の労働者・学生・市民諸君！全国の闘う人民諸君！五・一五沖縄返還をめぐる現下の階級攻防の渦中で、われわれの道を鮮明にし、決起せんことを呼びかける。五・一五沖縄返還をめぐる攻防に際し、われわれの任務は明確である。即ち、沖縄返還を階級的統合・支配・抑圧の圧倒的強化・拡大のステップとせんとする政府・支配階級の野望を粉砕することであり、この闘いを軸に七〇年代階級攻防の端緒が主体的後退戦にある階級情況を突破することである。五・一三〜五・一五への総結集と総決起を克ち取り、かかる任務へ前進せんことを訴う。

戦後相対的安定の危機

昨年の後半を色どった戦後世界の解体と流動、危機の深化は七二年の前半を通し、ますます激烈となっている。ベトナム―中東地域を焦点とする民族解放戦争はインド亜大陸へ拡大し、パキスタン国家の解体まで至った。また国連―三ブロック体制は解体し、その再編はあれこれ画策されているが、これがかって有した階級的、支配的統合力を回復することになり得ないことは明らかである。IMF―GATT体制の解体、崩壊と世界的不況の嵐は戦後相対的安定を揺す。かかる情勢の新局面はわれわれが階級情況として「情勢の昂揚」と押えたものであるが、この危機に対して 世界の支配階級 は新たな 世界再編を 対置してきた。

国連―三ブロック体制の解体と無力性の露呈に対し、中国の国連招請、米中接近による再編として あるいはIMF―GATT体制の崩壊に対する通貨レートの調整を軸とする再編として。また後進地域の革命戦争の限定化としてである。

だが戦後的世界の上部・下部構造の相対的 安定期の 流動と解体は、その危機の深化は、かかる支配階級―政府の延命―再編策を無効としている。

戦後的世界の危機の新局面と世界の支配階級の新たな延命―再編策の展開の中で、日本の政府―支配階級は沖縄返還を軸とする階級的統合―支配―抑圧強化で突破口を作り出さんとしている。

戦後的世界の相対的安定局面に対する人民の闘いはベトナム人民を突破口として進展している。

にもかかわらず、日本人民のたたかいを始めとする世界の人民のたたかいが主体的後退戦であるというのは依然として真実である。

戦後的世界の相対的安定期の解体と流動、世界の支配階級の新たな再編制と世界人民のたたかいの攻防、この現段階の磁場やベクトルはどこに存在するか。

歴史の新段階、新局面としての戦後的世界の解体、流動はどのようなものとして認識―把握されるか

❶歴史の新段階、新局面としてのメルクマールは国家間、民族間交通、即ち世界の新たな性格である。われわれはこれを過渡期世界としての戦後的世界の展開となづけてきた。国家と市民的社会、即ち今日の最も永続的、普遍的共同体の変容と新たな性格である。市民的社会の爛熟と呼んできたところのものである。

「近代」とよばれてきた歴史の軸は国家である。国家間交通（民族間関係）や社会的諸関係も含めた国家である。近代的民族国家、近代的資本制社会が歴史のメルクマールとなっていらい一貫しているのは国家である。われわれの時代は、にもかかわらず、この国家が新たな性格にあることこそ問題にせねばならぬ局面である。比喩的にいえば、ヘーゲルやマルクスの時代が国家の興隆期であり、レーニン、トロツキーの時代が国家の成熟期であるのに対して、われわれの時代は国家の老化・衰退期である。老化―衰退期の国家という特質をふまえた上で問題の軸は国家であることを押えねばならない。とすれば歴史の新段階・新局面としての国家間、民族間交通、市民的社会の爛熟は国家という磁場ベクトルへ 集中 するものである

❷国家という磁場やベクトルへ集中する戦後的世界、過渡期世界の危機と矛盾は上部構造としての幻想（精神的）交通、軍事的交通（戦争）下部構造としての経済的交通の自然発生的な新展開と現体制での桎梏として存在する。上部構造、下部構造の総体に渡り自然発生的交通が、民族国家―民族経済の枠を越えていくのに対して現体制は民族国家―民族経済を絶対的で至上のものとするから。

例えば核抑止戦略による世界戦争の不可避性は一方で核占有国による平和的な世界体制再編（中国―アメリカ（擬制的）の接近による新国連体制）を形成しながら、他面世界戦争の不可避性としての民族解放戦争を激成する。これは民族国家―民族経済を絶対的で至上のものとする支配的階級と、そのもとで被支配階級・人民の存在という階級的存在に根拠ずけられるのであるが、他面階級的存在が民族国家―民族経済にこそ立脚するところによる。

❸従って現存の支配階級―ブルジョアジーは国家の老化―衰退を支えるべき、あたかも民族国家―民族経済を越えたような世界的交通を上部構造―下部構造で追求しながら、他面で民族国家―民族経済の強化―拡大をはかる。例えば日本のブルジョジーは新国連体制に向けて五次防＝核武装やIMF―GATT体制の再建に向けての諸策をあたかも民族国家―民族経済を越えた世界再編のごとく宣伝しながら、民族国家―民族経済の強化とするように。

沖縄にかける支配 階級の野望は何か

戦後 相対的安定期の 上部―下部構造の総体に わたる 流動―解体、新局面に対して、日本のブルジョアジーはどのような方向―方針をとらんとするのか。

❶国連―三ブロック体制の解体と無力化に対して核武装＝核占有をテコとして、新国連体制へ 向う。ソ連― アメリカの 核武装占有、核抑止戦略による国連―三ブロック体制が、フランス、中国の核武装で再編を余儀なくされた事態はよく知られている。日本のブルジョアジーは アメリカの 核占有、核阻止戦略と国連―三ブロック体制に戦後世界の永続性と普遍性を、つまり自己の安定をみていた。だが新国連体制、米―中接近のドラマの なかで 彼らは独自の、アメリカを媒介としてのか直接的な核武装による新国連体制へ志向すべく総括している。

❷民族解放、革命戦争がまた国連―三ブロック体制を解体―無力化 したのに対して、反革命戦争の強化と民族自決、民族独立という地域的限定化で 対応せんと したように、日本のブルジョアジーはアジア人民の革命戦争の本格的反革命参加を 開始 せんとしている。

❸日本のブルジョアジーは核武装や反革命戦争を一気に独自に進めるのでなく、アメリカ帝国主義を媒介とするか、独自でいくか現段階での展開はきわめて過渡的で あるが。何故なら❶、❷の諸策が日本の支配階級の主体的選択でなく、しいられたものであるから。

❹戦後の新局面や新段階に対応する下部構造での動向については ここでは詳しく展開しないが、これらも新たな方向をどらんとしていることはいうまでもない。とりわけ❶、❷としてある軍事外交路線と開発路線という現代帝国主義の世界路線の方向そのものの分岐と二重性ということから重要であるが、世界戦争の不可能性が即開発路線へ行かないことは押えておかなければならない。

かかる動向の中で、五・一五沖縄返還を日本の支配階級はどのようなものとして意図しているか。

❶何よりもアジア人民への新たな抑圧に向けて沖縄を前線基地化し、拠点とすることである。

❷核武装を突破口とする新国連体制への、独自核抑止戦略で（米の核抑止戦略の導入であれ）沖縄をその拠点とせんとすることである

❸農村解体を60年までに遂行した彼らはその最後で、最大の拠点として、低賃金労働力の構造的創出と市場確保である。

❹だが彼らの最大の野望は国家的、民族的統合力の確得である。

戦後世界の相対的安定局面が解体と流動へ旋回し、危機へ深化していく中で、国家の統合力を強化することは必死のことがらである

新たな沖縄闘争の開始に向って前進せよ

かかる階級情況の中で、即ちわれわれが「情勢の昂揚と主体的後退戦」といった前者の動向の中で主体的後退戦を克服する道こそ、一切の任務である。主体的後退戦＝持久戦の持続的展開と克服への道というとき、それは「運動なき時期の組織戦一般」でも「党の運動」、「大衆の運動」の強調一般でもない。最も肝要なことは階級情況の磁場を押えることであり、そこでのわれわれの運動的、組織的任務を明らかにすることである

世界の支配階級の体制再編と生殺権の争握という動向に抗し、自力で闘いを展開するベトナム人民から、日・米両帝国主義の支配と統括に闘う沖縄民衆、帝国主義的政治・社会再編に反撃する日本の大衆の闘い、これらを赤い糸のようにつなぎ、世界の支配階級の総打倒への血路はどこか。われわれの原則は次のこととして明らかである。

❶今日、世界の民衆・人民の闘いを世界革命に向って結合させていく内容は一国の権力・体制の打倒と世界の解体は不可避に結びついていること、この立場と内実の貫徹であること、これである。

❷同時に今日の革命は世界革命であるが、それは民族国家、国民国家的革命であるということである。

これらのことはマルクスやレーニン、トロツキー、毛沢東達もとってきた原則である。だがわれわれは彼らと異っている時代に生きている。必然のごとく、この原則は新たな内容としてなければならない。歴史的情況として、彼らの時代（国家の興隆期、成熟期）と異った時代（国家の衰退期）にわれわれが在ること。及び国家をめぐる外的（他国家）、内的（市民社会）関係の認識とその止揚について主体的により深く、現実的に問われていることとして。例えばマルクス、レーニンにとってこれらの諸関係は楽観的にか、時間的な未来の問題として処理出来たが、われわれにはより切実なこととして在るように。

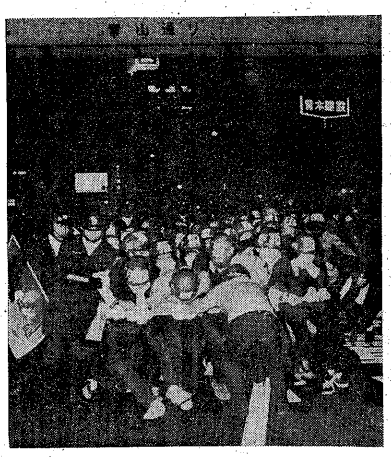
われわれがこれまで幾度か、主体的後退戦といってきたのは、この国家の他の国家、市民社会、国家自身の領域について、現存の支配階級のアンチ（イデオロギー的勢力的）以上のものを獲得出来ていないことである。

ここでの血路を開かなければ後退戦は克服出来ないし、そこの突破さえあれば後退戦―持久戦は高次のものへ転化されるし、新たな結合を生むであろう。

持久戦―後退戦のうちに、けれども自然発生的に、不可避で、必至のこととして展開されている沖縄民衆、日本人民のたたかいを「擬制的沖縄闘争」の終りと「新たな沖縄闘争」の開始として発展させなければならない。

沖縄への自衛隊進駐粉砕・帝国主義的諸再編粉砕（日琉一体化粉砕）はかかる与件との結合の中でそれ自身にとってだけでなく、階級闘争総体の突破口を形成する。

擬制的沖縄闘争の終りと新たな沖縄闘争の開始へ向って五・一三〜五・一五へ総結集せよ！



＜写真＞青山通りで戦闘的デモを展開する反帝戦線部隊

4・28闘争へ圧倒的決起

関西 烽火派の敵対をはねのけ闘いを貫徹

全国の同志諸君！読者諸君！72年4・28沖縄闘争は、政府ブルジョアジーの沖縄返還＝日琉一体化路線のどす黒い野望が露呈する中で、これを粉砕し抜く闘いの内容の決定的飛躍を問うものであった。それは現時点における沖縄民衆の闘いが、自衛隊沖縄進駐阻止―第3次琉球処分粉砕を正面からかかげ、その様な闘いが民族的契機や、歴史的契機を収奪され続けてきた沖縄民衆の怨差の水圧を、「世界―民族」「国家―市民社会」空間を底辺から突き上げる現実的力として明確に胎動しつつあることに対する、左翼諸潮流の解答能力の質をも鮮明にするものであった。しかし、沖縄民衆のかかる苦闘に対して ［判読不能］的連帯を叫びつつも、闘いが内包する質に全く無理解な、既成左翼や新左翼諸潮流は、佐藤政府の沖縄返還に伴う諸々の失態にかみつくことのみよくし、4・28―5・15にいたる一定程度の政治的高揚の局面へ、無自覚にのめり込んでいったのである。

われわれは、階級攻防の現局面をはっきり見すえ、沖縄闘争が有する戦後世界を画する普遍的質を自らの闘いに引きつけることの中に本土―沖縄を通底し、世界同一革命―世界プロ独へ至る闘いの水路の切開を、全力で取り組んで行かねばならない。われわれにとって4・28沖縄闘争は、永続的沖縄の苦闘を引き受け、新たな沖縄闘争の開始を宣言するものであった。

首都圏では、神宮通公園に三〇〇〇名の圧倒的な労・学・市民を結集して、闘いは開始された。既に明らかな様に、われわれは、昨秋三里塚―沖縄闘争の断固たる実力闘争の展開によって、敵権力との激烈な攻防関係にあり、当然にもかかる闘いは、政治警察の組織破防的弾圧から多くの同志を防衛し同時に 獄中闘争を闘っている 同志に強固に連帯して行く為にも、密集した組織戦で打ち抜かれ、三里塚、砂川、学園、職場で闘いを押し進めている同志諸君の報告を圧倒的な相手で確認していった。その後、首都圏反帝戦線二〇〇名の部隊は、機動隊の隊列右側面に対する狂気の弾圧をはねのけ、最後まで、強固な隊列をもって闘いを貫徹した。

一方、関西の地においては、4・14共産同関西政治集会をもって公然と叛の旗をかかげた我反帝戦線の、竜大闘争に示めされた組織力と実践力に恐怖した敵権力は、デモ申請を却下するという予防弾圧攻撃をかけてきた。これに対して反帝戦線の諸君は、かかる権力の弾圧をはねのけ、4・28沖縄闘争を断固として克ち取るべく、圧倒的な、拠点・街頭情宣を展開してきた。しかし、4・28当日になってこの間、われわれの前に一切姿を見せることのなかった浄目のろし派が反帝戦線の部隊が同志社大学での情宣活動を展開しているスキをうかがって京都某所に準備されていた旗ザオ、私物を持ち出すという姑息な手段で、われわれの闘いに対する敵対を働き4・28前段で のかかる 権力とのろし派の二重の妨害をうけるという情況にあって、関西地区反帝戦線三〇の部隊は、首都圏と全国の同志に連帯し断固とした闘いを貫徹したのである。

われわれは、中之島公園に結集した大衆に対して十分な組織的対応が取り切れなかったことを痛苦に総括しつつも、烽火派の無原則的党派闘争に対しては、全力をもってこれを粉砕し抜き、必ずや関西の地に、革命派の旗色を鮮明に打ち立てるであろう。

（綱領）域の深化に向けて

5・13沖縄討論集会

時 5月13日(土)PM4時〜9時 (開場)

所・中野公会堂 (国電中央線中野駅南口下車5分)

発言者
吉本隆明・上原生男
中里 効(沖青同) 神津 陽(共産同)

主催・共産主義者同盟

集会への招待

全ての同志諸君、日夜様々な戦線で＜かくめい＞の事業を担っている諸君、新たに歩を踏み出さんとしている諸君へ、共産主義者同盟は熱い連帯の意を表明すると共に、五・一三沖縄討論集会への招待状を届けます。

五・一五沖縄返還式直前に、別記のような陣容で、本集会を設定した意図は以下によります。

我々は「沖縄返還協定」調印、批准、批准書交換阻止を掲げ、全力でそれを実践してきました。大ブルジョワジー共のロボット佐藤政府は、自衛隊立川抜き打ち進駐、沖縄装備独断搬入、沖縄密約暴露等で満身傷を負いながらも、なりふりかまわず沖縄返還を完了させんとしております。議会内与野党取り引きの領域では、沖縄闘争は終焉したかにみえ、敵は連合赤軍キャンペーンを上乗せして、過激派掃討への自信を回復したかにみえます。

我々は敗北し、敵は勝利しつつあるのか。否、百度も否です。本当の意味での沖縄闘争は今始まったのです。我々はより深い沖縄―ニッポン―世界への問いつめと実践を持続せんと思います。

議会内取り引きには、階級攻防の焦点がない事は「新左翼」の認識の前提でありました。だが、自、社、民社、公、共の復帰―返還に、沖縄奪還、返還粉砕を叫んできた部分は、釣魚台略奪阻止の中核派、自衛隊派兵阻止決戦の理論戦線派にみられるように、一斉にスローガン、論調の変更を行なっています。

彼らはサンフランシスコ条約第三条破棄をいち早く下ろし、沖縄闘争は終ったとして反戦反基地闘争へ乗り移った革マル派を批判しながら、結局一円周上の対点に位置しているに過ぎないのです。東京がダメなら名古屋があるさという発想、あらかじめ逃げ道をつくった上での誇大宣伝、これらは戦後日本の「党―大衆」関係の特徴です。

我々は敵の擬制的勝利の土俵上で、水を掛け合っている「新左翼」を残念に思います。我々は「マルクス主義」「科学的社会主義」のドグマや、遂行する見込のまったくない軍事宣伝や井の中の自慰に過ぎない党的立場の強調などは、犬に喰われてしまえと考えます。

だがそうであるが故に、本当の沖縄闘争の始まりの意味を明らかにし、民衆の共同の財産として獲得する作業も又、飽くなき実践の持続と共に急務であると考えます。

我々は69年共産同党内闘争当時より、公開綱領論争を提起してきました。階級闘争の時間性の抽象としての綱領、空間性の抽象としての戦略という我々の見解は、党派の私有財産として知識層や大衆への踏み絵として了解されてきた新旧左翼全ての綱領―戦略観とは無縁です。大衆闘争が昂揚すると党派が成果を奪い合い、知識層の発言を内容を問わず権威づけにのみ利用し、同一内容を大義名分のみの様々な実行委員会団体がしゃべる下らなさからは、彼らも解放されねばなりません。

我々は、本当の沖縄闘争の始まりを、国家―市民社会、民族―世界空間を破砕する「階級」創成への歩みにみます。政治の最上位で敵は国家を超ええない社会の最下位で小共同体をプラグマチズムによってしても破砕しえない。それに対し我々が、政治的再編の射程で沖縄を把えるのでは決定的に不充分であり国家の側からする国境拡張を、民衆間の交通能力の獲得で無化せしめる新たな共同性の質を提示せねばならない。

沖縄はアイヌの怨念をも引き受け、皇統二千六百余年を逆転させ中国の国連加盟とベトナム戦争激化の矛盾をも止揚しうる今もっとも大きな手がかりです。

我々は、我々が選んだ、現代の「沖縄」に想いを凝らして最高の技倆を有する方々と全面的に意見を交換し、それを全民衆の＜かくめい＞への共有財産へ転化させて行きたいと考えます。

無名の戦士達よ、大地より総結集せよ。

—竜谷大—

学費闘争の持続的展開から 日―琉一体化阻止闘争へ起つ

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！京都深草の地で、学費値上げの既成事実化と苦闘している竜大班よりの闘争報告第二弾を送ります。

私立大学学費値上げ阻止闘争の中心環＝入試強行粉砕闘争を、文字通り、全力で闘いぬいた竜大阻止共闘は、官憲の執拗なる弾圧、サンケイ新聞等のデマ宣伝をはねのけ、四月十七、十八日両日の入試を団交へ切りかえる闘いを貫徹した。

四月十四日の「共産同関西政治集会」を踏え、また竜大阻止共闘内の激志一致を克ち取り、入試強行―新入生との契約書の交換を通じて大学当局が行った学費値上げの既成事実化を、四・二七大衆団交の大学執行部との確約の獲得でもって、我々は粉砕した。

我々は、一・一八学生大会で三千五百名余の学生大衆の結集の下で議決された「阻止共闘案」の＜原則＞と、個別闘争課題である「学費値上げ阻止」の闘いの現在性の喪失のはざまで＜原則＞と現在性の変化を貫く運動を追求している。

寮廃止―移転策動に対しても、我々は、寮の闘う諸君と我々阻止共闘の共同闘争機関を形成するなかで実力阻止の闘いを展開せんとしている。

四月十七日経済学部の入学式に学費値上げ既成事実化粉砕、入学式を団交へと言う闘争方針の下、介入——遊亀学長代行に、四月二十七日 我々との団交を 確約させた。

四月十八日の九時からの法学部の入学式に、介入せんとするや、昨日の我々の闘争を総括し何がなんでも強行しようとする法学部日共教授連、学生課、体育会系学生の実力妨害に会い、この苦い経験をふまえ一時からの経営学部の入学式にのぞみ粉砕した。その後経営学部の一回生の 控え室に 介入し、徹底して学費値上げ策動の責任を追求するや、彼らは「値上げは、やむをえない」「妻や子があるから云々」で大学執行部を弁護するのみである。のこのこあらわれた法学部の日共教授二名を糾弾し、阻止闘争を妨害したことを自己批判させた。

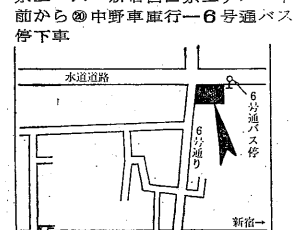
今後我々は、更にこの闘争を深化させるとともに、社会拠点竜大で、日琉一体化阻止の闘いを、形成していくつもりである。

全国反帝戦線総決起集会

時・5月14日PM6時

所・幡ケ谷区民会館（渋谷区）

（交通）
京王線 幡ケ谷駅下車6分
京王バス 新宿西口京王デパート前から⑩中野車庫行―6号通バス停下車



5・15沖縄闘争

時・5月15日PM2時

所・港区 三河台公園

（地下鉄日比谷線六本木駅下車溜池方向5分）

新たに戦列へ結集される戦士達へ
叛の旗の下 七〇年代闘争の血路を拓け

新入生諸君へのアピール　首都圏反帝戦線連合

今春、新たに戦線に加わらんとしている若き戦士たちへ、春季闘争に向けてのアピールをもって、首都圏反帝戦線連合からの連帯の挨拶を送りたいと思います。

若き戦士諸君！今何よりも問われているのは、4・28～5・15沖縄闘争の大攻勢の中で、ブルジョア政治委員会の沖縄返還＝日琉一体化路線を粉砕する戦列の強化なのだ、ということを確認してほしいと思います。

4・28～5・15、就中5・15沖縄闘争において剔出しなければならない問題点、闘いの中心環は一体何なんのか。いいかえれば、4・28～5・15過程においてブルジョア政治委員会の跛行的策動のもとに沖縄闘争は終焉するのだろうか。私たちはそうだと答えるとともに否なのだと答えねばならないのです。

そうだと答えた場合、69年11月日米共同声明以降72年5月5日の過程は、要展対象に規定された中央闘争は確かに最終的局面を向かえるでしょう。しかしこのことは革命主体、闘争主体の無力性、無効性のつきつけとしてある、ということでは断じてないのです。このことはつまり、60年代的性格としての政治意識形成による階級形成論、政治過程論に裏打ちされた実体的権力把握の発想自体の誤謬から止揚せよ、ということなのです。いいかえれば旧来の党―大衆構造の枠内の現場主義と戦略主義の対関係の止揚の問題としてあるのです。

スケジュール闘争―カンパニア集会、情勢追随の武装カンパニア闘争という八派―全共闘体質から訣別せよ、ということです。八派―全共闘構造がカンパニア集会で政治内容の差を競い、戦術の差異による大衆吸引のレヴェルにあったが故に、大衆闘争機関の大義名分争奪戦や、党派引き回し、根回し、現場追随の相互利用、相互補完から離陸しなければならないのです。

そうした戦略主義―現場主義の枠内にある限り、蜂起や軍事―武装という言辞宣伝派が輩出し、八派―全共闘の解体を地区共闘―行動委補強でとりつくろうとも、党―大衆構造の質的転換には至らないのです。ほんとうに問題にしなければならないのは、次のようなことなのです。69年ブンド内論争―赤軍―中間諸派（戦旗派）―我々の問題提出が新左翼諸党派へのつきつけの普遍性を有していたが故に、現在の蜂起戦争宣伝派―理戦＋旧八派―我々へとスライドしている。だが全共闘の党―大衆構造においてのヌエ的存在は、連合赤軍、全共闘運動のしんがり三里塚闘争を頂点とする半公然大衆武装闘争によって自壊しつつある。

つまり連合赤軍のP・B・M作戦、銃撃戦がその政治的共同性の質を、その実践力とは別に現存的・ブルジョア的共同性を破砕すべくほんとうの意味で人民の海どの結合しえたかどうかの冷徹な革命派の自戒としてある。また三里塚において大木よねさん―大竹ハナさんを生み出した反対同盟の社会的共同性の質の変容が、闘争現場においては現場―支援組織の構造が逆転して現われる党―大衆構造の解体において問われる政治的共同性との関係の止揚としてあるのです。即ち、党―大衆構造、現場―支援構造を社会的共同性においては関係の持続の問題、小共同性の解体、逆転として現出する局面を階級へ、かくめいへ至る政治的共同性と社会的共同性の二重化の形成に向けて沖縄闘争を戦い抜かねばならないのです。

また沖縄闘争がむしろ4・28～5・15段階においてこそほんとうにはじまるのだ、といったとき、前述した前提を踏まえつつ、以下のことを私たちにつきつけているのです。

昨夏のニクソンの二大声明以降向かえたドラスチックな過渡期世界の新局面展開は上部構造においては核戦略問題、下部構造においては通貨問題をネックとしている。つまりニクソン訪中声明、新経済政策発表が意味したことのよりリアルな証明としてある。中国国連加盟―ニクソン訪中が意味することは、中国のゾ連化であり、日米帝国主義の軍事外交路線の参加と再編なのである。

つまり中国に革命戦争の民族的―一国的収約―圧殺させようとすることであり、同時に直接的戦闘からの撤退によるニクソン・ドクトリン以降のベトナム革命戦争の一国化―地域化―民族化集約―圧殺の目論見なのである。新国連体制と擬制的三ブロックの再編過程のなかで中国の後進諸国の民族解放闘争への反動的対応（東パキスタン、セイロン闘争等）と日米共同声明―沖縄返還への日帝の軍事外交路線の強化の呼応が、過渡期世界の危機への新局面として現出している。

またニクソン新経済政策は戦後過程の米帝の生産力―資本力の圧的優位のもとのドルを背景としたIMF―GATT体制の動揺と危機に対する米帝の必死の延命策としてあるのだ。敗戦―戦後処理としての膨大な軍事―経済支出と諸帝国主義の高度成長による米帝のドル支配力の低化、一方ワールド・エンタプライズによる投資貿易、資本、信用の過剰化と重なりユーロダラーの圧力になっている。こうした事態での米帝の新経済政策の本是は、技術革新力―資本力の優位性からの経済力の回復平価調整による世界通貨としてのドルの負担の転化なのである。

こうした局面がつきつける問題は核抑止戦略によって支えられている新国連体制は、中国加盟が経済過程の世界性から逆照されるように、通貨問題での総合政策を有せぬ跛行的とりつくろいの脆弱性故に過渡期世界の再編は戦後的世界秩序を突破しえないし、民族―国家問題に一切回答を有しえないのである。

そうした意味において〈沖縄〉問題は、ベトナム戦争が民族解放民族独立を上限とし、帝国主義者からの自らの民族的契機を奪還していくという民族解放闘争の限定性と他方その限定性自体が同時に戦後世界秩序破砕に、民族的契機の奪還が国家―民族空間の破砕に至るという二重性のうちにあるように、現存の国家形態が自らの民族的契機が他の異族―異種共同体―性をくり込まざるをえぬ必然性を、民族的契機の奪還が民族主義へと屈折するのでなく、国家―民族空間の破砕へはせいたるものとして、そうした共同性―空間性の創出として世界同時革命―世界プロ独へにじりよる闘いとしてあるのだ、ということを確認しなければならないのです。

そうした国家―民族空間での沖縄闘争の綱領的視座からの深化と政治方針において、スローガンは沖縄返還＝日琉一体化粉砕、自衛隊派兵―侵略前線基地化阻止、全基地撤去―立川自衛隊本進駐阻止として4・28～5・15沖縄闘争を共に戦い抜こうではありませんか。

私たちの沖縄人民の永続的苦闘と真に連帯していく方途においてもっとも謙虚であり、戦いの時の時においてはもっとも大胆である確執は他党派の混迷の底の底まで見透してしまうのです。

中核派の奪還論の破産からの尖閣列島問題への逃げ込み、青解の本土―沖縄を貫ぬくソビエト政府樹立、理戦のプロ独政府樹立の空論性、そうした日―琉同一民族論に対して日―琉異民族論からの沖縄県委の解散から機関紙発行停止までおいつめられたフロント派、一般的な反安保、反基地闘争としてしか把握できない革マル派、社共は論外として私たちのまわりの不毛性を全面的に止揚する苦闘を共有して いこうでは ありませんか。

新たな戦士、同志諸君、昨秋から戦い抜いている全都、全国の学園・学費闘争が、68～69年の全国学園闘争が入試をネックとして拡散していったように、今回もまた入試問題に全面回答しえぬが故に青学大、明学大、法政大、理大、学習院大、竜谷大、弘前大、東北大教養等々の反帝戦線戦士を先頭とした全国の闘争の爆発を全共闘運動の止揚に向け孤立した苦闘を今強いられている。だが私たちは70年代前段の戦略環を沖縄―砂川―三里塚と措定し、戦い抜いている激流を学園、社会拠点へ還流せしめ、持続した闘いを大衆組織への指導と関係のかくめいとして新たな戦士たちとの戦列での出会いを克ち取っていくでしょう。

そしていつもそうであるように闘いの昂揚期のあとの主体の後退―持久戦の苦闘の間ゲキにハイエナのごとく闘争サン奪を目指す革マル派、日共―民青との党派闘争の必至の覚悟もまたほんものの革命闘争を担う者の地獄のひきうけとして断乎戦い抜こうではありませんか。また革マル、日共との党派闘争は統一戦線問題において必ず回答しなければならない問題なのです。

全ての若き戦士たち、4・14関西政治集会の成功、弘前、仙台、北海道、信州、中国、四国、北九州等孤立した悪戦を展開している全都、全国の反帝戦線戦士とともに4・28～5・15沖縄闘争を叛の旗の下に結集し総力戦で撃ち抜こうではありませんか。新たな戦士たち、かくめいの荒野へ旅立て！

5月13日沖縄討論集会
於中野公会堂

―4・14報告―

関西の地に戦闘宣言を打つ

「党―大衆運動」の止揚に向け
弘前・小樽地区でも集会貫徹

全国の同志諸君！「叛旗」読者諸君！今、関西の地に「叛」の旗は、雄々しくひるがえり、〈かくめい〉の焔は、燃え上がらんとしている。

我々は、この間、蜂火派の妨害を一切許さず、各大学、街頭での圧倒的情宣を貫徹し、4月14日、大阪桜の宮公会堂において、「共産同政治集会」を、地区反帝戦線の同志及び、戦闘的学生・労働者市民百二十名の結集でもって獲ち取ったことを報告したい。

集会は、まず、大阪・神戸・京都の各地区反帝戦線の戦線報告から始まった。原則的な党派闘争と新しい運動・組織の創出に向けて孤立した戦線を展開している反帝戦線の同志は、竜谷大・神戸大における学費闘争の報告と、4・28～5・15沖縄闘争に向けての力強い発言をうけ、基調報告は、関西地区反帝戦線連合の代表が、関西における戦闘宣言を述べ、続いて砂川ざん壕闘争委、三里塚現闘団の連帯アピールを受け、首都圏反帝戦線連合の同志のアピールを受けた。救対アピールに続いて、三上同志の「沖縄闘争と民族問題」と題する講演は、民族―国家―世界の問題から、連合赤軍問題を含め、終始、会場を熱気に包んだ。

集会は、インター合唱を経て、反帝戦線を先頭に京橋公園まで、デモを貫徹し終った。

69年秋より既に、2年余りの歳月が流れ、67年10・8羽田闘争より4年の月日が流れ去った。〈たたかい〉の高昂と退潮を経験している私たちは、今が最も困難な時代であることを知っている。風化し、拡散した関係は、再び凝縮しうるか。

60年代階級闘争が登りつめた地平は、行政的権力の壁を暴力的に粉砕せねば一歩も進み得ないということと、また、現存の世界から離陸し、それと抵抗したエナジーが、普遍性を獲得しうるかどうかという事であった。そして、総体として、「党―大衆」運動・組織の限界であった。私たちは、敗北の因を、外的要因に求めるのでなく、内的なものとしてとらえ、それを克服せんとしたのである。

革命主体の危機の克服がないかぎり、階級闘争の後退局面は持続するし、いかに、情勢の危機をアジリ、革命の現実性を叫ぼうが、決して〈かくめい〉へは至り得ないことを知っている。主体・原理の新しい創出は、日本の革命運動の負的伝統との対決であり、種々の悪しき主体性論、古い革命論との対決であり、まさに革命の〈かくめい〉であった。そのようなことを踏え、私たちは、党派闘争こそ70年代への〈環〉であると宣言したのである。

こうした提起は、ブンドがもっていたい意味での運動主義を越えるものであり、組織の問題で言えば、運動による組織形成でなく〈組織から組織を作る〉という問題であったと考える。〈組織から組織を作る〉と言ったとき党への帰依や、党倒錯者とは別の回路を意識―行為―生活 総体から する〈階級の形成〉であると考える。

ニクソン二大声明以降の過渡期世界の新局面は、70年代の客観的条件の大きな変動が存在している。こうした客観情勢を主体がいかにとりこむかが問われているのである。何度もいうように、客観情勢が危機であり、「革命の現実性」があると語るのは、他方に主観主義、空論主義を生んでいく。

また情勢とのかかわりをもつことのない主体性論は、自己完結した革マル風な主体性論となる。そして、情勢が提出している現実性つまり、ベトナム革命戦争であるとか、民族解放闘争とかへ、自己をひきつけていく〈かかわり方〉は被抑圧民族の立場に立つという弱い環革命論を生んでいく根拠であると考える私たちは、最も困難な位置にある。支配階級の動揺、危機を革命へ旋回させる方途は、彼らの根拠そのものを撃つことが重要である。支配階級の表現する諸策に、反対抵抗するのでなく、そのような反対・抵抗の表現（内容の差はあれ）をするのでなく、存在の根拠を撃ち、越えていく〈たたかい〉を展開しなければならない。階級闘争はまさに、〈存在〉をめぐる攻防へと発展しているのである。

沖縄のつきつける中心的問題は「沖縄が日本に帰ってくる」とか「基地が残る」というところにはなく、沖縄が日本の国境内にくみこまれる「異種の共同体の接触―接触の仕方」にあると考える。このことに種々の返還論・奪還論・解放論そして、日沖ソビエト政府樹立、日沖プロ独政権樹立にいたるまで一切回答しえてないと考えます。沖縄返還の問題を、日米間の単なる政治的取引とみる視点は、決して沖縄へ肉迫できず、政策レベルの問題へおしこめていくことになる。

沖縄の本質的問題は、異種の共同体の接触であり、独自の共同性を有しつつも、政治的にそれを表出したことのない沖縄民衆の契機が、日本の民族的―国家的契機といかにふれあい、どこへ至るかである。つまりは、民族・国家―世界の問題である。

現存の世界は、民族・国家間の併存と民族・国家間の対立の矛盾的展開の中にある。国連体制は、民族・国家間併存の表現であり、これは、言うまでもなく、民族・国家間の対立を止揚したものではない。こうした絶対的矛盾の中で平和と戦争という交通形態をとってきたのである。民族・国家間の併存への欲求が、体制論や三ブロック論を生んできた一方、民族・国家間の対立関係はより本質的になり、中国における台湾問題、ベトナム、朝鮮、ドイツに於ける分裂国家の問題、そして日本と沖縄を巡る問題と、より細分化され、民族・国家の存立を危機においこんでいる。ベトナム革命戦争は、一民族―一国家への限定付け策動を突き破り、体制論・擬制的世界論を突破せんとしている。この世界的波及がベトナム革命戦争の勝敗の分岐である。

私たちの中心的課題は、民族・国家間交通を止揚する新しい世界間交通の提出である。支配階級自らが築き、そしてそれ自身が矛盾となっている民族・国家の擬制的共同性を、歴史の遡行者として越えていくのである。〈かくめい〉の道はそこにあると言える。

私たちは、これを世界プロ独と呼んできた。現存の国家の危機を救援するのは、戦前・戦中への回帰やブルジョア地球主義などではなく国家そのものを止揚する世界プロ独であるということをはっきりと確認する必要があると考える。

私たちの〈たたかい〉は、支配階級の攻撃に反撃するだけではなく、彼らの根拠たる民族・国家を止揚する 共同 的契機をつかみとり、階級へ形成することにある。そのような 組織 を創ることにある。

全国の同志諸君！とりわけ関西の同志友人諸君！我々は、この集会が、理戦派のごとく党派の看板かつぎでないことを、はっきりと宣言しておく。関西ブンドの凋落につけ込み、旗上げするというさもしい根性は、もち合せていない。我々の分派以降の、関西での一年の、悪戦 を踏えてであり、〈かくめい〉への旅立ちの、政治集団としての宣言であり日本革命運動の負的伝統を越え、関西ブンドの十年の歴史を一気に越えんとする戦闘宣言である。我々は、もはや、党派闘争から得るものは何もないと 考えている。ひたすら〈わが道〉を、〈かくめい への道〉を歩むのみである。我々を映す鏡のないことを残念に思う。我々は、今後、様々な領域で、独力で〈たたかい〉、様々な諸君と出会うだろう。しかし、我々は、野合、迎合は断固拒否するし、あくまでも我が道を貫く所存である。そこで立ちあらわれる敵は、倒すのみである。原則的党派闘争を貫徹し、セクト・ノンセクトのもつれ合いの局面にくさびをうちこみ「党―大衆」の止揚へ、孤立した悪戦の荒野へ。「叛」の旗の行くところを見よ！

6月本進駐阻止に向けて

塹壕の要塞化進む

〈砂川〉立川自衛隊進駐阻止闘争

三月上旬の自衛隊先遣部隊抜打ち進駐から五十日余 立川は再び静けさの中に身を没している。時流に乗ってしか闘いを組みえない諸潮派は今、立川のことなどさらりと水に流して、権力の設定した次なる土俵に向って行進を続けている。彼らの行先が沼地ならば、微力ながらも我々の本進駐阻止に向けた権力―我々―日共の組織戦を花向けにしよう。

確かに状況一般として見るならば立川は今、非常に困難な地点にさしかかっている。政和会（自民党）の巻き返しは、南口区画整理立川市民祭り問題と連合赤軍問題を媒介にして、勝共連合とロンドを組んで推進されている。又日共は権力―自民党からする攻勢に何ら答えることなしに、自衛隊進駐阻止闘争を諸要求貫徹路線の中に流し込み、「明るい立川をつくる会」の分裂を前に、早くも平和委員会、諸要求貫徹実行委への無原則な乗り移りを完了している。三・一九集会に三里塚、北富士の名で三千人を集めた中核派はその後一度も姿を見せない。

このような一方での政治的不毛性とは別に、自衛隊先遣隊はなしくずし的に増加され、その数は百名に達せんとしている。沖縄返還が完全に政府ペースに乗せられ、事務的手続のうちに強行されようとしている時、立川においても権力は六月本進駐をなしくずし的な部隊増強によって事務手続で終らせんとしている。

しかし権力のこの目論見はもろくも失敗に帰すであろう。砂川十五年の闘いを支えた民衆のエネルギーの奔流に迫りつつある砂川反戦ざん壕は、自衛隊機の計器飛行訓練の一切を反戦放送塔によって阻止していると共に、六月本進駐阻止決戦に向けさん壕の要塞化を着々と進めつつある。さらに反戦ざん壕闘争委を中軸とした阻止共闘は先遣部隊の解体を六月本進駐阻止を射程に入れて攻勢的闘いとして準備しつつある。

我々はこの攻勢的闘いによって再び全立川に流動化の波を創出し権力―自衛隊を進駐阻止―自衛隊解体闘争のルツボの中にひきこむであろう。

砂川には今、新たな生命が脈動しつつある。千七百五〇米の灰色の滑走路はその新たな生命に包囲されている。砂川反対同盟が宮岡青木両氏によってしか表現しなくなってからすでに久しい。しかし今まで沈黙を守っていた一般同盟員との間に援農等を通じて新たな連帯の紐が結ばれつつある。これもまた基地を包囲する新たな生命である。さん壕闘争委員会は地元砂川農民との連帯をさらに深め、基地拡張阻止から基地撤去を目指す闘いを砂川農民とともに全立川住民の闘いとして必ず創り出すであろう。

現在自衛隊立川基地進駐阻止闘争の唯一の拠点である反戦ざん壕反戦放送塔に対して、権力―機動隊の挑発がひんぱんに生じている。巡回警備中の装甲車からさん壕に向って石を投げてくる。我々は一日も早くさん壕の要塞化をなし遂げねばならぬ。物理的には一袋百キロの土のうを一・五米の高さに約千個、それを支えるものとして地元農村を始めとする全立川の進駐阻止勢力として。六月本進駐阻止決戦に向け 闘いは 開始されている。

圧倒的カンパの集中で

救援体制の更なる強化を

――赤灯社アピール――

全都、全国の反帝戦線の戦士諸君、「叛旗」講読者諸君！赤燈社よりの事務所開設のお知らせ、獄中同志早期奪還のカンパ要請文をお送ります。

同志諸君！現下の階級攻防の高次化は、不可避に革命主体―組織再編を迫っている。"赤燈社"設立も非合然―非合法領域において闘いに対する組織破防法的攻撃を断乎として粉砕し抜く闘争主体―組織防衛の水準から要請されているのである。

われわれは「叛旗」28号においで「赤燈社」建設を以下の三点から焦点化し、アプローチをしてきたのである。

❶非合法、非公然活動と赤燈社
❷獄中・裁判闘争と赤燈社
❸赤燈社と活動資金

❶とのからみからいうならば、「赤燈社」建設、救対活動は非合法―非公然領域に対応する合法―公然部門一般としてあるのではない。つまり、半合法―非合法、半公然―非公然領域における組織再編の環は、一般的な任務プロパーの問題ではないのである。何度もいっているように非合法―非公然性はブル法一般との関係のみではなく、現存的、ブルジョア的現実性―規定性から離陸し、止揚せんとする個体―組織の側にこそ獲得されるものなのであるからなのだ故に、公然闘争、半公然―非公然闘争、地下活動、獄中―裁判闘争等においての徹底した政治指導の非公然性の獲得、常態化としてあり、個体の領域においての階級闘争の負価性のよきりが、公然―非公然領域を問わず、意識的―自然的等価性として使いこなす方向で措定されなければならないのである。

❷の射程においては赤燈社建設の要である。現下の支配階級の弾圧が、明確に革命主体―組織の〈存在〉からの抹殺を主眼としている時、われわれは自らの〈闘争〉のうちに〈死〉の領域への踏み込みを上限とし、自らの闘争の〈確信性〉が左翼ロマン主義、党物神化等としてではなく、家族、男女関係の自然過程の水位のひきもどしによる〈生活〉の水圧に抵抗し〈かくめい〉を持続する根拠を、闘争―獄中―裁判という自らの負性のベクトルが含む個体性―特殊性を、如何に内化―普遍化するかが問われているのである。現在的に獄中同志の多くが権力の恣意的なデッチ上げ、フレームアップによる逮捕、重罪適用による「権利保釈」の幅を越える罪状によって大量起訴のうちにある。このことはもっとも冷徹な司法権力再編動向の解明と、具体的なリアリティをもった獄中―裁判闘争方針の主体的組織的対応を要請しているのである。

そうした具体的内容、獄中同志との連絡等については、赤燈社では「煉獄の炎」を発行している。「煉獄の炎」については、現下の破防法適用、保安処分、刑法改悪等の問題点の含みのなかでの司法権力再編の水準と獄中―裁判闘争の現実的な諸矛盾がかかえもっている軋轢に対して、獄中同志―救対、獄中同志―弁護士、救対―弁護士、組織―弁護士、獄中同志―組織、救対―組織、獄中同志―家族、獄中同志家族―組織等の具体的対応をなしていくものとしてある。祥細は「煉獄の炎」参照。

❸については❶、❷をなしていく現実的な力であり歯車である。現在の獄中同志奪還のためには最低五百万円の金額が要請されている。さらに事務所開設にともない救対活動費等多くの同志、未知の戦士たちの圧倒的なカンパを要請します。赤燈社は全ての闘う戦士の最先頭でヴィヴィットな肌のふれ合い、孤立した抗道を掘る不可視の出会いをなしていく所存です。

編集局よりお詫びとお知らせ

「叛旗」読者諸氏に編集局よりこの間の新聞発刊に関する諸々の不手際を、深くお詫びします。

第一に、第29号一面紙上に掲載した「当面の集会―行動方針」において、4・18軍事討論集会の中止、4・28反帝戦線決起集会の会場変更に関する、十分な情宣が出来ず、同志諸君、読者諸氏に多大な困惑と迷惑をおかけしたことをお詫びします。

第2点に、第30号（4月20日）を、諸般の事情により、読者諸氏にお届け出来なかったことに関して、編集体制の確立な自己反省から、以後全力をかけ切って発刊体[illegible]

定期購読料　半年分 ¥800　一年分 ¥1500

4・18集会中止についてのお詫び

四・一八〈軍事〉討論集会がさん壕闘争委員会の不手際のために中止せざるを得なかったことを、全ての闘う人達に深く自己批判します。

我々は、中止にいたった不手際を今後の闘いの中で、真に普遍的な闘いを砂川・立川に創り出すと共に、別の機会に集会を開催することを誓って集会のお詫びとします。

〈文責〉反戦さん壕闘争委員会
行動隊　村山　茂

自衛隊立川基地6月本進駐阻止
6.11労.農.学立川大集会
PM・1時砂川反戦広場
主催・6・11実行委員会

寄稿

再開発―青い空の胸さわぎ

―千葉県柏市の場合―
柏駅東口再開発阻止共闘会議

全都、全国の読者諸君に、本紙上を通じて、千葉県柏市の地域住民闘争を紹介する。

既に本紙上に於いても語られているように、支配階級の行政的諸力を駆使した帝国主義的社会再編は戦後社会の擬制的秩序―安定構造を根底からつき崩し、民衆の生活破壊を不断に伴って展開する。

もちろんかかる支配階級の本格的社会再編は、国家―地方行政的諸権力の駆使という、その意味で支配階級のもっとも現実的な[illegible]あるのであるが、しかし、60年代の生産力理論を一方で支えた住民の安定―向上といったレベルで沈黙する大衆―「声なき声」の生活信仰がもろくも70年代初頭で崩れてゆく中に、地域住民運動の今日的位相が照し出されている。

私達にとっては、この様な地域住民運動の報告を取りあげるのは党派の側から運動に意味付与することでもなく、また、この説明の様に、プラグマチックな介入をせんがためでもない。

「叛旗」創刊号の闘争報告に対する編集方針で私達が明らかにしたように、私達は、投稿、[illegible]

[illegible]

住民通信№65「柏駅東口住民の権利を守る会」機関誌より

・生まれて初めての"デモ"

11月28日、再開発阻止共闘会議主催のデモに参加しました。私達守る会は、この「市民生活を破壊する」再開発の阻止のデモに積極的に参加していきました。住みなれた町の中を、旗を持ち、プラカードをかかげて歩くとは、生まれて初めてであり、気はずかしさも伴い、照れくさいことでしたが、黙っていては、生活が破壊されます。[illegible]

[illegible]

共産主義者同盟政治論文集Ⅰ　―発売中―

〈かくめい〉への越境

―階級を創る道―

〈内容〉　B5版全237頁¥700円

Ⅰ　70年代階級闘争をどう闘うか　Ⅳ砂川闘争
Ⅱ　三里塚闘争　Ⅴ67年羽田闘争以降
Ⅲ　沖縄闘争

――新聞発売の各書店にあります――